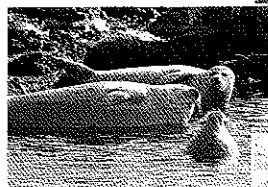


# 序章 宗谷海峡をあいだに

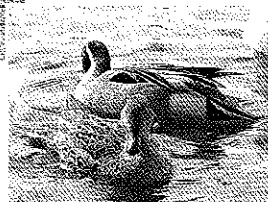
稚内は北から旅をしてくる鳥たちが最初に羽を休める休息の地であり、北へ向うものたちが最後の準備を整える場所でもある。眼前に広がる宗谷海峡からオホーツク海は冬になると流氷が押し寄せ、トドやゴマフアザラシが回遊し、彼らが食糧とする魚介類の豊かな海である。また、高緯度に加えオホーツク海からもたらされる冷涼な海霧は、花の島と呼ばれる礼文島と同じように、高山植物を育てるには良好な条件を備えている。



ゴマフアザラシ



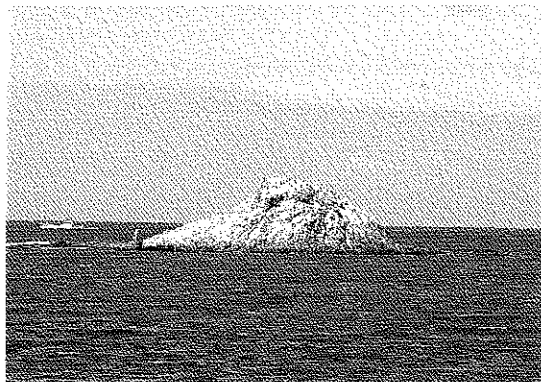
コハクチョウ



オナガガモ

18世紀の地理学上の問題は、両極を除くと樺太周辺が空白地帯として残されていた。樺太は大陸から陸続きの半島なのか、島なのか。サガレンは樺太の一部なのか、別の島なのか等、解明しなければならない問題であった。また、徳川幕府としては手薄な蝦夷地の警備に加え、樺太の様子は全く不明のままであった。

当時、ロシア船が日本近海に出没し、ロシアの勢力が樺太のどこまで及んでいるのか、或いは中国清朝の勢力は樺太に達していないのか、さらにノシャップにロシア人が上陸して土地の様子を窺うにいたって蝦夷地さえも脅かされると言う、北方地域の緊張が増していた時代であった。



宗谷岩(弁天岩)

宗谷の地名の由来は、アイヌ語のシヨウヤ(海獣のとまる磯の岳)、ソウヤ(蜂の巣)と呼ばれていた岩名、ソーヤ(岩嶼、あるいは裸岩の地)など、江戸前期にソウヤ場所が開設される前の地名に関してはいくつかの説がある。

松浦武四郎「廻浦日記」はウエントマリ、ソウヤと並べた上で「ソウヤはサンナイの方に至るにソウヤ岩と云大岩むかし有し其名にして、其を以て今は惣場所の

名、並に当所の名とす。本名はヒリカトマリなるべし(ウエントマリの名を避けてピリカ・トマリつまり「よい・泊地」と呼んだものか)。其潤内暗礁多くして出入の船は至って容(れ)にくし。然れども海底一面の平暗礁なるが故に、其ヒリカトマリに入る時は如何なる風波も障ることなし」と書いた。これから見ると、昔サンナイ(珊内)のソーヤにあった会所をここに移したのは舟着きのよい場所という意味だったらしい。会所は前の場所の名をそのまま持って移転するのが当時の例で、それからここが宗谷となったのであろう。

宗谷場所の始まりは貞享年間(ジョウキョウ、1684～1687)とされ、宗谷巖島神社の鰐口の奉納年代から見れば天明2年(1782)以前に求められる。

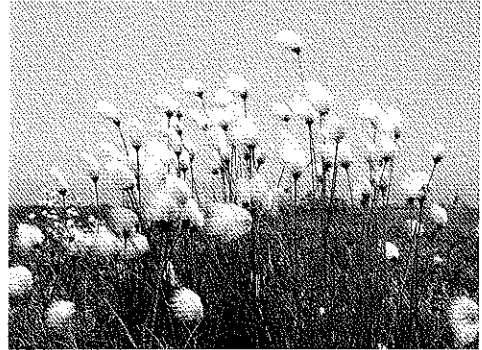


ピリカタイチャン

現在、宗谷一帯は樹木がなくササに覆われた周氷河地形の土地であるが、宗谷の近くにアイヌ語で「ピリカタイ=美しい森」という地名がある。明治44年の大火以前は鬱蒼とした太古の森が広がっていたのであろう。

様々な出来事があるって日本史の中に宗谷が登場し、歴史上に名を残した人々が頻りに宗谷を訪れ多くの記録を残すのは、これからすぐ後のことである。

この冊子では、天明の蝦夷地探検の庵原弥六、壮絶な宗谷警備の記録を残した津軽藩士山崎半蔵、樺太から大陸に渡った間宮林蔵、蝦夷地経営に力を尽くし樺太交易の改革者松田伝十郎、宗谷越冬警備の改革者梨本弥五郎に焦点をあて、当時の宗谷稚内を検証したい。



ワタスゲ